



2007 年 (平成 19 年)  
2 月号 (No. 741)  
社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価 1 部 150 円  
URL ● <http://www.jac.or.jp>  
e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

目 次

日本山岳会への提言  
「創造的登山」と日本の登山界… 1  
東海支部冬期ローツェ南壁登山隊… 4  
日本山岳会初めての地方開催による  
年次晩餐会を終えて… 6  
マナスル登頂50周年  
記念行事を振り返って… 7  
東西南北… 8  
日本山岳会の入会について  
The Lonesome Yodelerのレコード  
タトラの山旅  
支部だより… 10  
東海/秋田  
活動報告… 12  
医療委員会/事業委員会  
新土曜会  
図書紹介… 14  
図書受入報告… 15  
会務報告… 16  
ルーム日誌… 17  
会員異動… 17  
新入会員… 17  
INFORMATION… 18

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間  
月・火・木 …… 10~20時  
水・金 …… 13~20時  
第2、第4土曜日 …… 閉室  
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時

# 日本山岳会への提言 「創造的登山」と日本の登山界

本多勝一

高齢化、若年層の未組織化など、日本山岳会がかかえる問題の多くは、日本の登山界と共通したものであろう。そこで今後の日本の登山界を俯瞰するうえでも、山岳会の現状に焦点を当てて、問題点を明らかにしてみようと思う。

日本山岳会の「会報」としての本誌の編集長・神長幹雄氏から提言された主題は、日本山岳会の原点と現状の登山界の乖離にかかわる問題のひとつ「バイオニアワークと日本の登山界」です。ここで「バイオニアワーク」という言葉が使われたのは、私にとって初めての論文でもある「創造的登山と

は何か」を下敷きにしているからであって、今から52年前の学生時代にこれを書いた1955年当時の登山界を反映してもいます。詳細は拙著『旅立ちの記』(朝日新聞社「本多勝一集」第2巻)に収録されたAとBによる対話形式のこの論文の解説のとおりですが、論文の終わり近くに次のような部分

があります。

「B ……君は未踏峰未踏峰というが(注)、エベレスト以下主な八〇〇〇メートル級は、一四座のうち七座がこの夏(一九五五年)までに陥落している。なるほど低い未踏峰はまだたくさんあるが、それでは大したバイオニアワークとは言えなかりはしないか。

A 君にしちゃあ初めて核心を突く質問をしたね。実はそれこそ、チョモランマ登頂の報が伝わった時に岳人たちの受けたショックの正体だ。「ついにエベレストが陥落したのだ。失望落胆やる方なし。私はこの晩をけつして忘れないだろう——川喜田二郎『ネパール王国探検記』」ショックを受けなかつたなどと言ってる連中は、うそつきでなければ最初からバイオニア

精神が無かったのだ」

ここで「日本山岳会の原点」(神長氏)にたちかえってみますと、当時は「日本」のつかない「山岳会」ですが、設立に中心的役割をはたした小島烏水(久太)の著書『日本アルプス』(前川文栄閣・明治43年)の序文に次のような言葉があります。すなわち日本列島の大部分が「山といふ土地の屋棟」だとしたあとに、その中でも「最も高く、最も長く、最も大きく、最も秘密を蔵し、最も複雑に構造されてあるものは『日本アルプス』の名で括られる甲斐・信濃・飛騨・越中・越後などの、本州中央大山系である、これ等の山々は、今までの地図の殆ど凡べてに、空白であったやうに、人々の心にも、永久の空虚を残してゐたのでは、無



1955年ごろ、激論が10時すぎまで続いた京大山岳部の部室にて

かつたらうか」

すなわち小島鳥水は、日本の「空白」地帯に注目しています。このころは日本アルプス最高峰の北岳も、古くから頂上に「日の神」の祠があったものの、冬期は1925（大正14）年の西堀栄三郎らによるものが初登頂でした。

なぜここで私が「空白」をとりあげたかといえば、そこには川喜田二郎の受けたショックに通ずる

ものがあるからです。小島鳥水をとらえた動機の大きな部分に「空白」地帯があった。ということは、日本山岳会設立の当初から空白地帯たる未踏峰への欲求——創造的行為——が大きな動機だったことにほかなりません。当時もし北岳その他の高峰が現在と同じように大衆化なり俗化なりしていたら、鳥水がそのような欲求を抱いたとは考えられぬことです。それはも

う創造的登山ではないのですから。こんなことは分かりきった指摘にすぎません。しかし、「創造的登山とは何か」を書いた1955年当時は、必ずしも分かりきったことではありませんでした。このころ私たちの大学山岳部では現役学生によるヒマラヤ遠征が大いに議論されていたのですが、若手OBからはそれに強く反対する圧力があり、激論はついに折り合うことがないまま、現役の中で海外遠征を实行したい私たち10人ほどは、若手OBよりさらに上の世代（今西錦司・梅棹忠夫など）の支持を得て山岳部から独立し、探検部を創設するに到ります。1956年に創設するや、その年のうちに2つの現役隊がパキスタンやイランへ出かけました。海外渡航の自由化以前ですから、当時としては画期的です。

この7年後にあたる1963年、私は「創造的登山とは何か」の続篇ともいえる「山は死んだ」を発表します。これはいくつかの遭難事件取材を契機に書いたのですが、要するにそれ以前のような登山界への訣別の章でした。あれからすでに44年。この論文で示された見通しは、この間ほぼそのとおりに進行したと思います。第三者による最近のある論文が、そのことを適切に述べて下さったので、以下に概要をご紹介させていただきます。『山の本』2003年春季号の福島功夫氏による拙著「山を考える」評です。

福島氏はまず、平山ユージ氏のフリークライミングと、山野井泰史・妙子夫妻のギャチンカン北壁生還劇にふれたあと、次のように述べます——

「平山氏や山野井氏のようなスーパースターを持ち出さなくても、昔では考えられなかったような登山は多い。たとえば、ゴルジュ突破って何？ いちばん昔の山登りの面影を残しているはずの沢登りの世界で、最大の課題が詰め上がったたらホテルが建っている沢のゴルジュの通過とは？（中略）何でこうなったのか、という道筋は、ともかく自分がかつて夢を抱いた登山の世界のことなのだから、押さえておいたほうがよい」

そこで拙著「山を考える」（実業之日本社・1966年）現在には朝日文庫）収録の一文「山は死んだ」（1963年『文芸朝日』4月号）

から引用されて——「登山界がこのようなに奇形化し、分化し、老衰期にはいったのは、なぜだろうかそれはエベレストが処女峰でなくなったからである」

そして福島氏は、これを「今になってみると実に腑に落ちる論理」とし、たとえば「なぜ、最高の才能をもつクライマーの目標がエルキャピタンのフリークライミングなのか。——エベレストが処女峰でなくなったからである、といった具合に」と応用します。

さらに福島氏は、拙論の予見について「この四十年ほどの登山界を、これほど適切に表現した文章は、まずほかにないだろう」として、拙著を要約します。未踏峰はまだたくさんあるにもかかわらず、エベレスト初登頂を超えるような偉業はもはや地球上に存在しないこと、自分が身をおく世界から最高のものがすでに失われているのは、さびしいものであること、「山男の悲劇は、最終的にはここにある」ことなど。

神長氏が提言された主題「日本山岳会の原点と現状の登山界の乖離」は、福島氏の要約の最後から引用すれば、世界の登山界は「エ

ベレスト(登頂)を頂点として老衰期に入った。これからは登山がそういう世界であることをよく認識し、平和な『死期』が来るのを待つことだ。その後、登山界は本当の革命を遂げ、近代アルピニズムは真のスポーツに生まれ変わるだろう……」と予見されている。

となりますと、日本山岳会の現状は、まだ旧時代の価値観を引きずっているのではないかと疑うものであります。年報の『山岳』を見ても、そう思わせられるのです。むしろ日本勤労者山岳連盟が出している月刊の機関誌『登山時報』の方が、右にいう「本当の革命を遂げ」た点で「真のスポーツに生まれ変わ」っているのかもしれない。福島氏は最後にこう書きます。

——「平山氏のフリークライミングや山野井氏のヒマラヤ・アルパインスタイルを伝え聞いて、あらためて登山界は一度死を通過したのだと思う。そして、現在のクライミングが古典的登山のエッセンスを遺伝子のように残しつつ、新しいスポーツとして再生したことを示しているのなら、登山の混乱の時代を生き延びてきたぼくたちも、今、かつての老衰期の時代の登山

にきっぱりと見切りをつけられるというものだ」

さらに加えるなら、真のスポーツとしてあるていど生まれ変わっている例は、公刊されている定期刊行誌としては前述の機関誌『登山時報』に出ているような登山家ではないか。それを思わせるような登山報告を、手元にある去年の同誌目次の中から以下にいくつか拾ってみましょう。

▽中高年のためのネパールトレッキング案内「ヤラ」(一月号)

▽不思議を発見する山歩き「東石岳」(二月号)

▽気象情報の見方と使い方——春のハイキング(三月号)

▽南アルプスの静寂を求めて(四月号)

▽改正保険業法への対応は(五月号)

▽大日岳訴訟——第一審を勝訴(六月号)

▽ライチョウ目撃情報ネットワークの構築へ(一〇月号)

▽心拍計を使ってゆとりのある登山を(一二月号)

▽東日本女性登山交流会に寄せて(同)

▽登山のためのキネシオテーピン

## グ講座(同)

もちろんこうした傾向とは別に、遭難の分析や海外登山報告もありますが、それらにしても基本姿勢が従来の一般的山岳雑誌とは異なるといえます。

すなわちここには、すでに「スポーツに生まれ変わ」った側面がかなりみられるのではないのでしょうか。今後この傾向はいつそうすすんでゆくと思われます。

けれども、最近しばしば見られる登り方の中に、たとえば「100名山早まわり競争」とか、富士山なり北岳なりにひたすら短時間で往復する競争とか、要するにマラソンを山にもちこんだ類のものがあります。これには賛成しかねるのです。山を舞台とするスポーツ化は、やはりグラウンドや体育館での陸上競技とは違って、大自然に抱かれてのスポーツです。そこから多くを学ぶこと自体がスポーツの中に含まれる。まさに総合的スポーツだと思えます。

〔注〕原文は「処女峰処女峰というが」でしたが、処女峰という表現には抵抗を感ずる人々が特に女性に多いようなので、引用文以外では「未踏峰」と変更しました。

# 東海支部冬期ローツエ南壁登山隊

田辺 治

日本山岳会東海支部冬期ローツエ南壁登山隊は、3度目の正直でローツエ南壁の冬期初完登に成功しました。日本山岳会の皆様には、これまで長期にわたりご支援いただき誠にありがとうございます。ここに登山の概略を報告し、お礼に代えさせていただきます。

2003年、2回目の敗退をした時、私はまたここに戻ってこようとは思いませんでした。登頂へのリスクは描けるが、落右のリスクがあまりに高すぎるからだ。2度の挑戦を無事故で切り抜けただけでも、われながら上出来だった。しかし、3度目は、今度こそ死亡事故が起きるのではないかと、という恐怖があった。その一方「この壁を登ることはもう二度とできないのか」と思うと、悔しさと悲しさで涙がでた。私はこの壁をどうしても登りたかったのである。

そうしたなか、05年群馬岳連ナング・バルバット登山隊に参加し、ここで剣持典之と意気投合したこ

とから、冬期ローツエ南壁の再々挑戦に向け走り出すことになった。幸い今回のメンバーは、海千山千の強者が6名揃った。クライミンググシェルパも前回の15名から18名に増やして必勝を期した。

9月3日、日本を出発した登山隊は、まず高所順応トレニンングのため、シシャパンマに向かった。ここで雪の多さに驚かせられたが、10月9日、全員主峰(8027<sup>トシ</sup>)に登頂し、トレニンングの目的を果たした。

カトマンズでの休養の後、11月13日、ローツエ南壁のBCに入る。今回は同時期、同ルートに、リ！チョンジク隊長率いる韓国隊が入っていた。彼らは非常に友好的で、気持のよい人達であった。そして彼らと共同してルート作業を行なうことになった。

3年ぶりの南壁は秋の大雪のため、たつぷりと雪をまとっていた。11月18日、登山活動を開始し、21日には前回と同じ地点(5900<sup>トシ</sup>)にC1を建設した。しかしそ



頂上稜線での田辺。左下はエヴェレスト(写真提供=中日新聞社)

の後、強風が吹き荒れた。本格的な冬の強風ではないものの、その強さは11月28日、千田と山本が、6800<sup>トシ</sup>付近で10<sup>トシ</sup>ほど吹き飛ばされたほどだ。フィックスロープに守られているため転落はしないが、前進は困難を極めた。また強風によってチリ雪崩が発生し、それに伴う落石がシェルパ達を襲った。行動をするたびに、荷揚げシェルパの負傷者が続出し、貴重な戦力が失われていった。

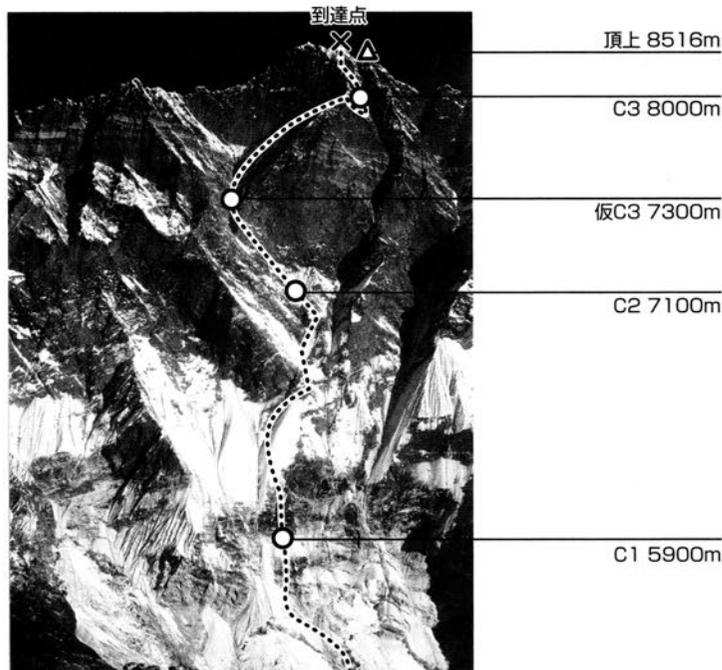
そうしたなか、12月1日にC2(7100<sup>トシ</sup>)を建設、6日、ルート作業のための仮C3(7300<sup>トシ</sup>)を建設した。そして12月7日、

仮C3上の困難な岩壁部分を突破したが、あまりの強風に翌日から5日間行動を停止せざるを得なかった。通常、プレ・ウインタールクリスマスまでで、その後は寒気を伴った本格的な冬の強風が吹き、登山は不可能となってしまう。そのためわれわれは、当初クリスマスをタイムリミットと考えていた。しかし、今や登山は大幅に遅れ、タイムリミットを延長するしかなかった。そして幸運なことに今年のはモンsoon明けが遅れた分、冬の到来も遅れたのである。

12月13日より登山を再開した。前回の敗因として、アタックキャンプのC3の位置が予定していた8000<sup>トシ</sup>より低くなってしまったことがあげられる。そのため今回は田辺パーティ(山口、ナワン・テンジン)がC3までのルート作業を担当し、確実に8000<sup>トシ</sup>にとどかせた。

21日、待望のC3が建設され、千田パーティ(剣持、ペマ・ツェリン)がアタックを開始した。韓国隊のアン・チヨン隊員と共同してルートを延ばす。私の思惑では3日で山頂に達し、日韓同時初登攀を果たすつもりだった。千田

## 登攀ルート



ローツェ南壁全景と登攀ルート  
(写真提供=中日新聞社)

パーティは03年とは別のラインで、山頂の左肩に突き上げるクローワールに入り、高度をかせいでいった。そして3日間で8200mに到達したもののここで時間切れとなり、韓国隊も残念ながらここで断念となった。

その先は田辺パーティ(山口、ペンバ・チョルテ)が引き継ぎ、1日目の26日、千田パーティ終了点から200mでクローワール最

深部に達した。前人未到のクローワールと想っていたのに、意外なことに古いフィックスロープの残骸があった。だれか先人が来ている。クローワールの最後は、クラックのない20mほどの垂直の岩壁で、とても突破できない。そして先人の跡もここで途切れていた。私がこれまで山頂の左肩に抜けられるものと信じていたクローワールは、袋小路だったのである。

唯一行けそうなラインはクローワール左手のボロ壁であった。ここを登った場合、稜線に出た後に、ローツェの山頂へは一旦下り、そして登り返さなくてはならない。しかし、ここしか取るべき道はなかった。明日に備えてクローワール左手に50mルートを延ばし、引き返す。

27日、ボロボロの岩壁を山口が果敢にトラバースしてルートを開いた。そしてガラスの粒のような雪でできた垂直に近い絶悪の雪壁を越えると、目の前に雪煙をまとったエヴェレストがあった。

15時35分、ついにわれわれは冬期ローツェ南壁を完登した。標高8475m。ここからローツェの山頂へは直線距離にして200mほどだが、一旦下り、登り返さなくてはならない。今のわれわれにはその余力がない。潔く山頂はあきらめた。

今、登山を終えて思う。私にとってローツェ南壁は、いつも私を見守ってくれる優しい女神だった。激しい落石と強風に、何度となく追い返されたけれど、3度の挑戦において、1人として命を奪われることなく、凍傷で指1本失うこ

ともなかった。幸運だったといってしまうとそれまでだが、私にはローツェ南壁の女神が特別に優しくしてくれたように思えてならないのだ。

帰国後、「残念だったね」というるな方に言われた。一部の新聞報道にもよると思うが、登頂できなかったことは申し訳ないが、私としては冬期ローツェ南壁を登るためにこれまで執念を燃やしてきて、今回夢はかなえられた。山頂は逃したものの、私の心の中では冬期ローツェ南壁は完結した。

なお、前日も今回もわれわれのルートは、トモ・チェセンが登ったとされる標高8200mの岩壁を大きく右に巻いている。チェセンがローツェ南壁を登ったかどうかという、登山史上の謎は解き明かされないままだ。

東海支部冬期ローツェ南壁登山隊  
総隊長 尾上 昇(63歳)、隊長 田辺 治(45歳)、副隊長 千田 敦司(32歳)、隊員 藤川 勝人(41歳)、剣持典之(37歳)、山口 貴弘(33歳)、山本 季生(32歳)、BC マネージャー 竹中 吾郎(46歳)

# 日本山岳会初めての地方開催による 年次晩餐会を終えて

## 開催の経過

18年度の年次晩餐会は、大勢の皆様のご協力を得て概ね問題なく開催、終了いたしました。初めから準備に携わった関係者として、困った点や今後の課題等について報告します。

発端は17年9月10日の支部長事務局会議でした。そのなかで、18年度の年次晩餐会を東海支部で開催できないかとの非公式な問題提起がありました。正式要請ではないものの、12月の第1土曜は各団体の忘年会が開催される時期であり、まず、会場の確保が問題となりました。適切と思われる会場の予約は1年前から必要であり、直ちにウエスティンナゴヤキャッスルと打ち合わせを始めました。その後、地方開催の話は一旦立ち消えとなつてしまい、予約を取り消すこととなりました。

ところが、年が明けた3月8日の理事会で、再び年次晩餐会の件がでて、急に正式決定となり慌て

東海支部総務委員長 佐野忠則

ました。すでに予備的な検討は進めていましたので、急遽支部内の準備委員会を立ちあげ、諸処の作業を始めました。会場のウエスティンナゴヤキャッスルは、残念ながら一部の一部屋はすでに予約が入つていて、やや手狭な会場での開催となりました。

## 検討事項は山積み

皇太子殿下のご出席を支部としては希望していましたが、芳賀前副会長を通じてご意向をお伺いしましたが、残念ながら今回はご都合がつかずご欠席となりました。さらに、開催に向け準備を進めるなかで事務局の問題として、①参加人員が全く予想できない②講演会内容③展示物の内容④晩餐会の演出⑤交流サロンの開催⑥翌日の記念懇親登山⑦費用の予測、など検討事項は山積みでした。テーマごとに小委員会を設け検討を進めました。なかでも記念山行については、参加者に満足していただくようにと、綿密な検討が進め

られました。テールマスター(TM)

晩餐会開催にあたり、支部の幹部や事務局だけが盛り上がりつつもとても対応できない事業であることは明確でしたので、いかに支部員に関与してもらうかが大きなポイントでした。方策として、TMを全て支部員で担当することとしました。「TMとしての要員が50名近くも集まるのか」という心配の声もありましたが、支部の重鎮である中世古直子会員に人選をお願いし、結果的には支部の盛り上がりには大きな効果がありました。

## 関係者全員集結

これまでの経験を生かすのが効率的であると考え、毎月の本部での総務委員会では、時間をかけて綿密な打ち合わせを進めました。また、晩餐会全体の流れを関係者およびTMに把握していただくため、11月23日に東京から神崎総務委員長をはじめ関係者に来ていただき、関係者全員が集結し意思統一を図りました。

## ローツェ中継

晩餐会演出として、ローツェとの中継を計画したものの、現地に専門家が赴く余裕がないし、大き

な機材を持ち込むことが出来ないなど、実施に際しては不安要素がありました。そのため、成功の確率は低いとの予想をしていましたが、関係者の努力の甲斐あつて中継は成功！晩餐会の大きな目玉となり、結果、出席された方々から高い評価をいただきました。

## 今後の課題

地方開催の問題点としては、晩餐会の趣旨とコスト面から参加人員の確保が最も重要です。開催決定は、会場確保の問題もあり1年以上前には必須と思います。また、晩餐会の2カ月ほど前に開催される支部懇談会との関係整理も、人員確保の面から必要と思われます。長い間の準備の成果は、当日の数時間に凝縮されます。その数時間に向けて思いつく限りの準備を、多くの手を借りて進めましたので、大きな失敗は無いだろうとの自信をもって臨みました。でも、いざ開催してみると失敗も多々あり反省も残りますが、関係者の意思統一のおかげで、事務局長の思慮不足を適切に補っていただきました。最後になりましたが、関係各位、支部会員、支部会友の皆さんに改めて感謝申し上げます。

# マナスル登頂50周年記念行事を 振り返って

マナスル委員会委員長 田辺 壽

2006年は、日本山岳会がマナスルに初登頂して50年の記念すべき年だった。この年に日本山岳会としては4つの大きな行事を行ない、当時、未踏峰だった8000級の初登頂を思い、新しい次のステップとした。

1959年5月9日、今西壽雄会員、ギャルツェン・ノルブの2名が初めてマナスルの頂上を踏んで以来、50年の間に41名の日本の



マナスル50周年パレードの記念式典にて (右端が日下田實氏)

登山者たちがマナスルの頂を踏んでいる。

そんな記念すべき昨年も、4隊11名のクライマーがマナスルに登っている。これだけ多くの人がマナスルに登るということは、マナスル初登頂が日本のクライマー達に与えたものが強く、かつ大きかったことの表われだと思ふ。

マナスルに関する記念行事として、次の4つのイベントを行なった。

(1)昨年2月に初登頂者の日下田實会員を中心に、新ルートの登頂者、女性初の登頂者等により「THEE マナスルデー」として、マナスル登山が日本の登山界に与えた意義を検証した。

(2)マナスル登山は、同時に日本とネパールとの国交開始のきっかけともなり、日本ネパール協会が中心に「JN50・ネパール展」が開催された。それに日本山岳会として、マナスル登山の写真資料と当

時の装備を展示した。

(3)カトマンズにおける記念式典に参加した。

記念式典は「ヒマラヤ観光フェア2006」の一環として、カトマンズ市内の記念パレードに始まり、ハイアットリージェンシーで開会式が盛大に行なわれた。

主催者側として、シャーマン・オリ観光副大臣をはじめ、アン・ツェリンネパール山岳会会長ほか多数の来賓が出席し、日本山岳会としては初登頂者の日下田会員と平山会長が壇上より挨拶をした。

引き続き、初登頂者である今西壽雄会員の息子さんご夫婦、松田雄一隊員と奥様、当時のマナスル登山隊の関係者が紹介され、同時にこれまでの登頂者が紹介された。

記念式典のあと、同じカトマンズでのヒマラヤ観光会議が、翌12日まで行なわれた。

(4)登頂50年記念トレッキングが実施された。

記念式典を終わって、96名の日本からの参加者は、12日から17日にかけて5パーティに分かれ、トレッキングを楽しんだ。

こうしてマナスル登頂50周年記念行事を終えた。



宇都木慎一

**小島烏水**  
World of Kojima Usui Collection

**版画コレクション**  
—山と文学、そして美術—

北京、広重、国芳、ピカソ、マチス、ゴッホ…  
幻の名コレクションが、いま鮮やかに甦る

[企画・監修] 横浜美術館 定価 2,300円 (税込)

大修館書店 直接注文 ☎03-3934-5131

N

# 東 西 北

# 東 西 南 北

S

## 日本山岳会の入会について

酒井晴永

一昨年秋、一人で滝子山南稜を登った。中腹付近で中高年のグループを追い抜こうと歩を早めた時、気になる会話が聞こえてきたので思わず聞き入った。「Sさんが日本山岳会に入ってたってよ」「へー、日本山岳会ってそんなに簡単に入れるのかい」「彼は地図や水筒を忘れて、登山のイロハも知らないのに」(以下省略)。察するところ、Sさんはひょうきん者で人がよく人氣はあるが、登山の基礎知識、技量も不十分でうっかり者らしい。日本山岳会に大勢の方が入会するのは大歓迎だが、ちよつと考えさせられた。

一昨年、日本山岳会の自然保護全国集会在高尾の森わくわくビレ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

ッジで開かれた。その時、発言者が日本山岳会の権威とか、名誉という言葉を多用されていたが、名誉、権威とは一体なんだろう。かつて日本山岳会会員は、地元山岳会や個性ある山岳会に所属して知識や技能を磨きつつ、さらに日本山岳会会員としても研究会や企画に参加していたからそれなりに知識、技量の研鑽を重ねていた。

最近では百名山や中高年の登山ブームと重なって登山ツアーやにわか登山愛好者が増えた。それ自体は結構なことだが、少し山に慣れてくると、日本山岳会という名前に憧れだけで入会を希望する人も増えてくる。それもよいとしても野放しというのはどうかと思う。

入会規定は今も昔と変わらず、登山歴や執筆書物、理事クラス1名を含めて会員2名の推薦が必要であることは変わりが無いはずである。登山に関して友人に軽蔑さ

れたり、からかわれるような人が入会するのはどうだろうか。入会する本人よりも推薦する側の問題であろう。私知っている理事クラスの一人は「いくら親しい人に推薦を依頼されても私が直接1回でも会ったことのある人か、山歩きを一緒にしたことがある人でなければ推薦できない」ともらしていたが、至極当然だと思ふ。だからといって入会資格を厳しくしようとは思わない。あくまでも程度の問題である。たとえ中高年から山歩きを始めた人でも希望者は大いに入会させ、知識、技能が未熟な人には日本山岳会として研修会を開き、研鑽の機会を与えるべきものと思う。それが日本山岳会の信頼を高めることにもなると思ふ。

理事会でも、ぜひ、ご協議いただきたいと思う。

## The Lonesome Yodeler

### ヨーデル

鈴木正規

ヨーデルは元来スイスあるいは

チロル地方の山男、または農民たちの間で歌われている。ドイツではヨルデンといい、地声と1オクターブ高いうら声とを交互に使う歌い方をいいます。

今から45年も昔のことだが、私の岳友「独りぼっちのヨーデル唄い」は、天才的な歌い方で、得意のヨーデルを剣の三ノ窓、穂高の岩場の登攀中にバテ気味になるとよく鳴らしたものです。あまりにも痛快なので、私たちが下手に真似て鳴らすと、上部の岩場から石が落ちてきそう……。そのころは、部員の間でヨーデルが流行したものです。合宿では夏冬とわず剣、穂高の岩場では登攀中に、めいめいがヨーデルをよく鳴らしたものです。

私が最初に入手したヨーデル盤は、55年も昔の、蓄音機にかける古いもので、表面は「独りぼっちのヨーデル唄い」、裏面「ヨーデル歌って1日中」。いつしかアルプスにも春が訪れて、丘の上立って胸一杯に大気を吸うと、甘い春の香りが体一杯にしみ渡っていくようです。こういった静かなアルプス地方の春を想像しながら、このレコードをお聞きください。この

盤の歌手はアメリカ人のハリ・トラニが自慢のギターを弾きながら、素直で美しい、のどを鳴らすヨーデルです。その後は、部員の間にはヨーデルに魅せられて競争のように次から次へと新しいヨーデル盤を注文し、買い求めたものです。

最近では100<sup>グラム</sup>位の軽いカセット・レコーダーが出まわっています。それを持ってチンネの中央バンドとか屏風岩の扇岩テラスで吹き鳴らすと、岩場に取り付いているクライマーたちには、どこかヨーロッパ・アルプスの岩場にもいるかのような錯覚を感じさせ、登攀には効果があると思うが、いかがですか。

## タトラの山旅

大橋 晋

スロヴァキアとポーランド国境にまたがる高タトラ山系を2006年9月初旬に歩く機会があった。西のシュトルプスケー・プレソ(湖)から東のタトランスカー・ロムニッツァまで、高タトラの山腹

につけられたタトラ街道の旅である。事前に用意したVKU社の登山地図「ヴィソケー(高)タトリ」では、ルートが赤、青、緑、黄に分けられている。

1日目 ポブラドスキー湖までの赤ルートのタトラ街道は、針葉樹の中を2時間で湖畔の山荘に着いた。荷を山荘に預け、青ルートのメングソフスカ谷の上部を目指す。這い松帯の岩の多い急斜面を登ると小さな湖に出た。湖を経て一段上のヴェルケー(大)ヒンツォヴォ湖(1945<sup>メートル</sup>)に着いた。強風で波しぶきが飛ぶ、この湖は高タトラ最大の氷河湖で、周囲は岩峰がそびえ、稜線の向こうはポーランドだ。

往路を戻り、1879年にハンガリー・カルパチア山岳会が建てた3階建てのポブラドスキー山荘に泊まる。すべてトイレ、シャワー付きの個室で、食堂のメニューも豊富。

2日目 再びタトラ街道を東に向かう。いきなり500<sup>メートル</sup>近い登り2時間でオストルヴァの峠に着く。

峠の上から南麓の広々としたポブラド平原、その南に低タトラの

なだらかな山並みが見渡せる。峠からトゥパー峰とクリン峰の緩やかな山腹に石畳状の道が続く。

いくつかの広い谷や稜線を越え、パティゾフスカ谷と出合う。奥にタトラ山系の最高峰ゲルラッハ峰(2654<sup>メートル</sup>)の偉大な山容が望める。ゲルラッハの南東麓を回り、ヴェリツケー湖のスリエスキ山荘に着く。設備・食事は昨晚同様豊富だ。

3日目 主な荷を山荘に残し、緑ルートのヴェリツカー谷を遡上する。湖に落下する大滝の右につけられたルートを登ると谷は大きく開け、高山植物が咲き乱れる草地に出た。広い谷のなだらかな登り、大小の岩が累々と続き、マーマットが姿を見せる。右奥のグリュヤティ・コベツ峰の裾を巻くように登ると、左にドウルヘー湖が現われる。

ここで往路を下り、赤ルートを東に向かう。道は這い松帯の中を進む。右下には黒い針葉樹林がポブラド平原に向かい緩やかなスロープを展開する。道はカラマツ帯から暗いトウヒの森に変わり、その先に今夜の宿ホテル・フレビエノクがあった。

4日目 今日はフレビエノクに滞在で、名物の滝を見ながら、ストウデニー川に沿って下ることにした。赤ルートを進み、青ルートと交わるところで青ルートを右にとると、草地の中に高タトラ最古のライネロヴァ小屋が建っている。次々に見事な滝が現われるのを見ながら下り、山岳鉄道タトランスカー・レスナー駅に出た。この鉄道は東のタトランスカー・ロムニッツァと西のシュトルプスケー・プレソの間を走っている。

深い森の中を通る森林鉄道だ。西の終点まで山岳鉄道の旅を楽しみ、スタリ・スモコヴェツに降り、フレビエノクに帰った。

5日目 曇り空の朝、昨日の道を途中までたどる。青ルートを見送り赤ルートを進み、オプロフスキー・ヴォドパード(大滝)に着いた。途中からぼつぼつ降り出した雨が本降りとなり、風まで加わる。この先眺望のないロムニツキー峰を経由する行程は無意味と判断し、フレビエノクに戻りスタリ・スモコヴェツに下って、山岳鉄道でタトランスカー・ロムニッツァに着いた。ここでハイ・タトラの山旅は幕を閉じた。

## 支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

## 東海支部

## 白神山地ブナ林再生事業見学

東海支部では「猿投の森づくり」など自然保護活動を推進しているが、青森支部で熱心に進めている「白神山地ブナ林再生事業」も一度勉強しておこうということになった。山川陽一自然保護委員長を通じて、青森支部事務局長の須々田秀美氏にお願いしたところ快諾いただき、この事業のプロジェクトリーダーである村田孝嗣会員に案内していただけることになった。この事業は、日本山岳会創立100周年記念事業である。

06年10月7日、東海支部会員4名は、台風並みに発達した低気圧の通過で、航空便や列車が欠航、不通になるなか、JR弘前駅にようやく辿り着き、村田会員の出迎えを受け、宿の熊ノ湯へ向かう。夕食を囲みながら、村田会員から

この事業にかける熱い思いを伺った。

「この事業の主目的は、荒れたスギ造林地を、ブナを主とする混交林の森に戻すことです。再生についての基本的な考え方は、スギを減らし、自生する高木広葉樹の生育を促し、ブナの自生苗が全くないか、非常に少ない場所にだけブナの現地苗を移植する方法を進めることです。すなわち、単調で不自然な森を作る「ブナ造林」ではなく、あくまでも、時間と自然の遷移で、遠い将来、自然遺産地域に見られるような見事なブナ林に育て上げるのがプロジェクトメンバーの願いです」

「放っておいてもいつかはブナ林に戻るでしょう。しかし、人間の壊したものは人間の力で早く元に戻してやりたい」

「当初、ほうぼうに教えを乞うたが、ブナ林をスギ林にしたことは



杉の葉で囲んだポット植えのブナ苗

あるが、スギ林をブナ林にするなど聞いたことがないと言われ、試行錯誤の連続でした」

「最初はブナの苗を植えることも考えましたが、ヤブを漕いで歩き回っているうちに、自然遺産地域の近くには、運ばれてきた未生（みしょう）のブナがふんだんにあり、育つ環境作りさえしてやればよいことに気がつきました。」と、氏の話は深夜まで続いた。

翌8日、雨の中、予定していた赤石川沿いの林道が不通のため、大回りして赤石川源流の作業現場に向かう。作業域は3カ所、それぞれ20ヘクタールである。途中ゲートがあるが、以前、車はここまでで、

作業者は荷物を全部背負い、13カ所の林道を作業現場まで歩いたとのことである。

作業現場では、倒れかかったり、枯れたりしたスギを処理した跡が至るところに見られ、事業の実態と、作業者のご苦労がよく分かった。未生（みしょう）がほとんど期待できないところではブナ苗の植樹も進んでいるが、苗をスギの葉で囲むと野ウサギが寄りつかないとか、高尾の森方式のポットを使うとか、いろいろと工夫をされている。

高台に登り、事業領域外も見回してみたが、放置されたスギにより荒らされた森がまだいくらかもある。隣接する白神山地の世界遺産地域にも足を運び、ブナの美林も見たが、このプロジェクトが成功して、このようなブナの森がどんどん広がることを大いに期待したい。

今回は見学のみに終わったが、村田会員から「作業にもぜひ参加を」と、お誘いを受けた（07年6月予定）。会員の皆様も参加されたらいかがでしょうか。

（猿山昌夫）

秋田支部

大館市、大山に登る

06年10月22日、久しぶりに里山山行を実施した。3年前から創立100周年記念事業・分水嶺踏査を支部山行としていたのでなかなか里山山行が出来なかった。今回は大山健助会員の喜寿のお祝いには早い、その意味も込めて、大館市松峰地区にある大山とした。参加者7名は、土崎支所前を7時に出発し、9時30分頃登山口のいる松峰神社前に着いた。

鬱蒼としたスギ林の境内地の中にある歩道を進む。久しぶりの里山山行に、冗談や笑い話も飛びだす。ところが、進むにつれて、前回りした時とは様子が違うことに気づく。途中から登山道にそってブル道(ブルドーザで削られた道)があり、山腹が大きく抉られていて、山頂部への歩道はなく、ブル道を進むと、なんとテレビアンテナ塔が2基も建設されていた(10時着)。これは地上波デジタル対応のアンテナではないかとのこと。前回、大館市街を見下ろして休んだ場所はなく、建造物のために山頂部では休む場所さえなくなつて

いた。記念写真を撮って早々に下山。窓岩に登ったり、鏡岩や岨岩を楽しみながら登山口に戻る。

松峰神社縁起によれば、弘仁8(817)年、僧空海により開かれ、松峰山伝来院という修験寺院であったという。859年の大地震で寺院、寺宝が全て埋没。再建された神社も幾度かの火災に遭ったが、その都度再建され、明治3年、維新政府の政策に従い、松峰神社として現在に至っているとあった。

そんなことを話しながら、登山口から神社に続く石段を数えながら登った。小さな祠もいくつかがあって参拝しながら回った。参拝を終わって登山口に着いたのが12時頃



大山頂上にて。大山会員の喜寿のお祝いもこめて登った

時間に余裕があるので能代市の「きみまち坂公園」に向かった。公園の展望台から米代川や対岸の七座山を眺めながらの賑やかな昼食となった。話題は会員の近況や分水嶺踏査のこと、今後の山行のあり方等、とても参考になることが多かった。公園の最高地点で四等三角点を確認したり、夫婦岩や一本松、屏風岩を上から見下ろし、きみまち坂の紅葉の名残りを楽しんで帰路についた。

【参加者】大山健助、鈴木裕子、鎌田倫夫、高橋忠雄、石川祐子、伊藤秀雄、長岡幸則 (鈴木裕子)

地形学者で鳥瞰図作家でもある著者の多彩な作品を集成!

山と氷河の図譜

—五百澤智也山岳図集—

五百澤智也著/B5判/144頁 2940円

(カラー63点、2色刷33点、モノクロ33点、計129点の作品掲載)

- I ヒマラヤの山と氷河 (ヒマラヤの全展望・鳥瞰図、山岳細密鳥瞰図、ヒマルチュリ地形図など)
- II アルプスの山と氷河 (未発表の水彩スケッチ)
- III 日本の山々 (山岳細密鳥瞰図と水彩スケッチなど)
- IV 日高山脈・日本アルプスの氷河地形分布図 (2色刷の立体図)
- V 日本地貌図 (日本列島の2色刷立体図)

の構成で多彩な作品を紹介。

\*全掲載作品に解説を付け、創作上のノウハウも紹介\*

五百澤智也の『山の科学画』展

千葉県立中央博物館 2007年3月3日(土)~5月27日(日)

後援:国土地理院、(財)日本地図センター、日本国際地図学会、(社)日本地図調製業協会  
協力:寒冷地地形談話会

開催時間:午前9時から午後4時半まで。毎週月曜日は休館(4月30日(月祝)は開館)  
交通:JR・京成千葉駅東口・JR蘇我駅からバス

講演会 平成19年3月18日(日)13:30~15:00 シンポジウム 平成19年4月21日(土)、22日(日)  
五百澤智也氏「山の科学画」 寒冷地地形談話会シンポジウム

〒606-8161京都市左京区 ナカニシヤ出版 TEL.075-723-0111  
一乗寺木ノ本町15 FAX.075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/〔表示価格は税込〕

青蔵鉄道チベット走破9日間  
~ゴルムドからラサ1,142km 走破 海拔5千mを体験~  
4/28発 ¥398,000

航空機のように車内は与任され、酸素吸入設備もある

**Wec** 株式会社ウェック・トレック  
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員  
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階  
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

# 活動報告

日本山岳会の  
各委員会、同好会の  
活動報告です

## 医療委員会

### 京都講演会「中・高年登山者の注意点」開催

06年9月5日、京大会館において松林公蔵氏による、講演会「中・高年登山者の注意点」が行なわれた。これまで、医療委員会主催の講演会はすべて東京で行なわれてきたが、今回、初めて関西で開催されたものであり、80名の参加者があった。横田京都支部長と藤枝委員長の挨拶後、講演が1時間半行なわれた。

松林氏（京都大学東南アジア研究所教授）は老年医学の専門家であるとともに、1989年にシシヤパンマに登頂された登山家でもある。講演は、まず、西堀栄三郎氏のフィールド三現主義から始まり、今後、高齢者にとっての生き甲斐が人類の課題になるというこ

と、さらに、病気や老化について進化生物学的立場からアカデミックに解説した。次に高齢者の特徴として、多くの病気をもち、症状が非定型的であり、個人差が大きく、合併症を起こしやすく、薬への反応が若者と異なり、精神症状を起こしやすく、予後が社会的な要因によって左右される点を挙げた。さらに、高血圧症、糖尿病について、予防活動の体験をふまえて紹介した。

つづいて、ヒマラヤ高所登山・トレッキングの豊富なスライドを示しながら、高山病について解説した。最後に、中・高年登山者のための医学的備忘録として、次のような具体的な点を指摘した。すなわち、決して急がないこと、登山が禁忌の病気は少ない、肥満は大きなハンディキャップになる、糖尿病の人は低血糖の症状があったら一滴のウイスキーを入れた砂



豊富なスライドを示しながら解説する松林氏

糖水を摂るとよい、高血圧症や高脂血症の人は通常通りに治療薬を服用することがよい、山中で特に降圧することは避ける、絶対安静よりも下山の方策を講じる方がよいことが多い、 $SP_{O_2}$ （動脈血酸素飽和度）は個人差があるので個人の変化を高所順応の目安にするなどよいなどであった。

質疑応答では、高血圧症や呼吸器系病気のある登山者からの質問や、睡眠薬やダイアモックスの使用、トレーニングについての質問など、活発に行なわれた。中島道郎氏から高山病と呼吸器系の病気と登山についてのコメントもあった。

## 事業委員会

### 戸隠スキー懇親会

事業委員会恒例のスキー懇親会が、1月6日～8日、長野県戸隠で開催され、33名の参加者があった。

さて、初日、スキー懇親会初参加の私は、雪の降る長野駅に着き、戸隠高原行きのバスに乗り、戸隠小舎へ向かった。小舎は、静まりかえった雪木立のなかに佇んでおり、とても雰囲気のある景色だった。小舎へ入ると宿の方と事業委員の方が温かく迎えてくれた。早速、暖炉のあるラウンジでの団欒に加えていただき、夕食までそこでのおんぎり過ごした。夕食は美味しい欧風料理とお酒をいただき、賑やかな自己紹介タイムもあり、会員同士の親睦を深めることができた。

2日目、予報どおりの荒天であ



雪の舞うなかでの記念撮影

つたが、楽しみにしていた会員の  
コーチ3名によるクラス別のスキ  
ー講習である。自己流20年、自分  
の欠点について言われたとおりに  
修正できない。午後は風雪が強ま  
り、全リフトが止まってしまっ  
たので小舎へ戻り、温泉へ出かける  
人、お蕎麦を食べに行く人、団欒  
に時を過ごす人と思いいいに夕食  
まで過ごした。その中、これまで  
の経験や山岳会の今後について、  
真剣に話をされていたのが印象的  
であった。夕食後、明日はせめて  
滑れる天気であるよう祈って早目  
に就寝した。

3日目、窓の外に曇天の切れ目  
から靑空が見え隠れするのが見え

た。朝食後に雪の舞う中、記念撮  
影をして解散。私は午前中のスキ  
ー講習に参加し、膝を前に、腕を  
前にといいコーチの指導により自  
分の滑りの欠点が分かったので、  
今シーズン、少しは上達した滑  
りができるように練習しなくては  
と思った。

晴れていれば、めのう山(17  
48m)山頂から戸隠連峰や北ア  
ルプスが望めたはずであるが、天  
の岩戸伝説の地でもあるためか、  
戸隠の風雪は、神秘的な雰囲気  
を感じさせ、私の初スキー懇親会  
終了となった。

最後に、楽しい3日間を過ごせ  
たこと、事業委員の方、コーチ、  
会員の皆様にお礼申し上げます。

(金中和美)

## 新土曜会 山の古典を読む会

06年11月30日、山岳会集會室に  
て「第2回 山の古典を読む会」  
を開催した。初回と同じく新土曜  
会以外の方も含めて15名の参加者  
があった。演者は古市進氏、講読  
書は『ヒマラヤの男』(テンジン・

ノルゲイ述 J・R・アルマン記)  
と『わが山 エヴェレスト』(テン  
ジン・ノルゲイ述 M・バーンズ  
記)の2冊。

ジョン・ハント率いる第9次英  
国エヴェレスト遠征隊において、  
E・ヒラリーとともにサード兼  
隊長としてエヴェレストに初登頂  
した、テンジン・ノルゲイの生い  
立ちから、シエルパとしてあるい  
はサードとして同行したさまざ  
まな遠征隊の記録を、シエルパも  
また登山家であるという視点から  
読み解いた。

当時の多くのシエルパはガイド  
であり、ポーターであって、契約  
以上の危険な仕事を避ける中にあ  
って、テンジン・ノルゲイはか何  
人かのシエルパは、自ら登山とい  
う行為に積極的に取り組んだ。そ  
の結果がテンジンにとって、エヴ  
エレスト初登頂という栄光として  
実った。

エヴェレストにアジアの無名の  
青年が初登頂したことは、世界に  
とって衝撃的な事件であり、無責  
任な報道や政治家にテンジンは利  
用されなかった。賢明なインド首  
相ネルーの助言と仲介によってテ  
ンジンは登山家として生きること

を選択する。

エヴェレスト登頂後、テンジン  
はこれといった大きな遠征には参  
加していない。だが、登山学校の  
主任講師という立場で生活を保つ  
とともに、後進のシエルパを登山  
家として育てることに貢献したと  
言っつてよいであろう。

もともとは無学であったテンジ  
ンだが、多くの登山家と交流を深  
めるうちに少なからぬ教養を身に  
付け、人を育てることの大切さを  
実現したものと思われる。

(箕岡三穂)

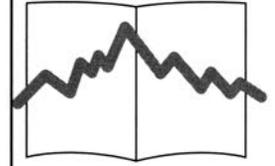


# ATLAS TREK

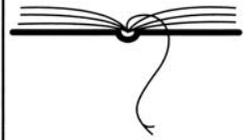
個人手配旅行から人気のトレックツアーや  
エクスペディションのアレンジまで。充実  
度が違う「旅」のプランニングをこころがけ  
ています。山旅などあらゆるジャンルを取り  
扱っています。お気軽にご連絡ください。

**株式会社 アトラストレック**  
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京 / 〒160-0008 東京都新宿区三栄町25	三栄ハウス202	TEL 03-3341-0030
大阪 / 〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5	中央谷町ビル501号	TEL 06-6946-9111
名古屋 / 〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113	オークラビル6F	TEL 052-788-2422



## 図書紹介



田中英雄・著

### 『里山の石仏巡礼』



2006年10月  
山と溪谷社刊  
A5判 229頁  
定価 1680円

にある、山を崇めた人々が残した石仏である。

本書を読むと誠に多種多様な石仏に出会うことが出来る。虚空蔵菩薩の信者は鰻を食べないなどと言うエピソードもあって、これはこれでためになる。(三代目志ん朝は願掛けのために本当に鰻を断ったことがあるらしい)。

石仏にまつわる神・仏の由来が分かりやすく解説され、その山と石仏の関係、信仰の背景までが理解できるようにになっている。難しい石仏には読み仮名がふってあり、種字梵字の説明もあってありがた。書名は地味ながら内容は面白く、読み進むと次々と目が洗われて、山歩きとは違った楽しみを発見する。

装丁・本文デザインは小泉弘氏で、左ページに写真とデータ、右ページに18行の本文とすっきりとまとまっている。文章は著者がジ

ャーナリストだけに要を得て簡潔、あるリズムがあって読みやすい。さすがジャーナリストの手になるものと言えよう。そして著者積年の経験が本書の随所に生きている。難を言えば、里山ブームだから

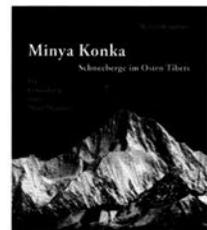
しいて「里山」と名乗ったのか、必ずしも里山とは言い難い高山も含まれていることか。目次には山名の下に石仏名を入れる親切がほしかった。本書の紹介が関東甲信越に限られているので、次は西国、東北などの石仏、あるいはもつと里の古道の十三夜灯などの話にも期待したい。

著者はガイドブックではないと言っているが、本書が山歩きの楽しみとは別な楽しみの実践ガイドの役割を果たしていることは言うを待たない。会員諸氏には本書のデータで十分だろう。

ともあれ山で石仏に出会う楽しみを教えてくれた本書に感謝する。山歩きに楽しみが増え、少しばかり得をした気分になった。さらに石仏に興味のある方は、著者のブログ「偏平足」を検索されたい。

(絹川祥夫)

Michael Brandtner・著  
『Minya Konkai』



2006年  
Detjen-Verlag, Hamburg刊  
215頁×230頁 336頁

副題に「Schneeberge im Osten Tibets (東チベットの雪山)」、Die Entdeckung eines Alpin Paradieses (ある山岳パラダイスの発見)とある。

中国四川省の西、青海省の南、雲南省の北に位置する褶曲山脈の山々を、最高峰ミニヤ・コンカを中心、梅里雪山からアムネマチンまで12の山・山群に章を分けて紹介した力作。この広大で入り組んだ高山地帯の地誌、踏査・登山史、紀行、ガイドがコンパクトに(とはいえず質紙にきれいな写真と地図・鳥瞰図を満載した、どっしりと持ち重りのする本だが)まとめられている。

ご存知のようにこの高地は中村保会員の瞠目すべき精力的な調査と報告によって、その詳細が広く知られるようになった。本書でも

中村氏の業績は写真を含め随所に反映している。ところどころに当該山域の探検家、登山家、研究者を紹介するコラムが挟まれ、氏の項もある。

それにしても漢字を読める私たち日本人は幸せである。本書にローマ字で表記された地名を同定するのに、この地方に不案内な私は疲れはてた。中村氏の著作が座右になかったら中途で投げ出したことだろう。(平井吉夫)

John Harlin III・編

『The American Alpine Journal 2006』



The American Alpine Club刊  
152<sup>2</sup>頁×229<sup>3</sup>頁 519<sup>3</sup>円

ここ数年、活動的な登山家にとって非常に魅力的なAAJを発行している編集基本方針は、AAJを重要な新登攀を記載した世界の「山岳記録雑誌」にすることだ。そのため世界各地の岳人や山岳情報通を地域別に指名し、彼らが担当地域の山岳会に、山岳会から登

山者個人にと編集者の意図を電子メールで直接伝えるIT駆使の登攀情報収集網を組織した。

現在、AAJが世界の登山者に求めている登攀情報とは、丸一日やそれ以上費やした新ルートに関するものである。

ただし、長年登られていなかった主要なピークやルートについて、その山に大きな変化があった場合、初めてのフリー・クライムなど新しいスタイル、登攀が劇的に速かった場合、冬季初登攀、あるいは将来のクライマーに極めて重要な情報を提供する場合には再登攀の報告も歓迎している。しかし、アメリカ人や日本人として初登攀、女性の初登頂、ハンデキャップ者の登攀などについては扱わないと断わっている。

このような方針のもとに、トップ記事としてナンガ・パルバット、パール壁アルパインスタイル新ルート、12日間のクインプ山群単独登攀、ハン・テングリ北面登攀、グレイト・トランゴ・タワーの新ルート、1日で2つのエル・キャピタンのフリークライミングなど、パキスタン、バタゴニア、チベット、ネパール、キルギス、アラス

カ、南極、ベネズエラ、シベリア、カリフォルニアからの報告17点が写真と共に133ページにわたり掲載され、今日の登山界の最先端の活動をj知る事ができる。

また、「登攀と遠征」欄も基本的には長躯の新ルート登攀記録だ。アメリカ、カナダ、ペルー、中東、アフリカ、パキスタン、ネパール、中国など22地域の恐ろしいほど多くの初登攀情報がびっしりと写真入りで327ページ記載され、まさに世界の山岳登攀記録雑誌であると納得させられる。

従来AAJでは標高についてフイートが多用され読みづらかったが、メートル表示が多くなり違和感が少ない。

「助成金」では最高4500ドル、総額1万9100ドルが15件に配布され、「図書紹介」では『The Elizabeth Hawley Story』など18点が紹介されている。

「追悼」には8ページを割くのみ。「クラブの活動」についても少ない。ただし、巻末の「索引」にはしっかりとページを取り、読者の便宜を図っている。

(南井英弘)

図書受入報告 (2007年1月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
中村博男	松浦武四郎と江戸の百名山(平凡社新書No.344)	198pp/17cm	平凡社	2006	関清氏寄贈
安川茂雄(編)	大島亮吉 登山史上の人々(愛蔵限定版)	268pp/20cm	三笠書房	1969	関西支部寄贈
根深誠	風雪の山ノート—ある大学山岳部員の足跡	244pp/20cm	七つ森書館	2006	著者寄贈
北大山岳部編集委員会(編)	北大山岳部々報(14号)2006	553pp/26cm	北大山岳部	2006	発行者寄贈
東海支部インドヒマラヤ登山隊(編)	JAC東海支部第8次インドヒマラヤ登山隊2005報告書	92pp/30cm	東海支部インドヒマラヤ登山隊2005	2006	発行者寄贈
小林碧郎	句集 目細	205pp/20cm	安楽城出版	2007	著者寄贈
岳人編集部(編)	ハイグレード山スキー—最新ルート集	175pp/21cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
青山千彰	山岳遭難の構図—すべての事故には理由がある	157pp/21cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
横浜美術館(企画・監修)	小島烏水 版画コレクション—山と文学、そして美術	223pp/24cm	大修館書店	2007	企画者寄贈
田中英雄	里山の石仏巡礼	229pp/22cm	山と溪谷社	2006	出版社寄贈
Stephen Goodwin (ed.)	『THE ALPINE JOURNAL 2006 (Vol.111, No.355)』	432pp/26cm	The Alpine Club	2006	発行者寄贈



**1月理事会**

日時 19年1月10日 18時30分～

20時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】平山会長、平林・橋本・

田邊各副会長、吉永・賛田・石田・

篠崎・大蔵・野口・斎藤・石橋・

古野各理事、山本・竹中各監事、

小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】藤井・渡邊各理事

**【審議事項】**

**1 長期登山計画について**

担当の橋本副会長より「長期登山計画プロジェクト」の現状報告があり、今後、海外登山の講演会の実施等を通じて意欲のある若手会員の気運の醸成を図りつつ、地域・目標とする山の絞り込みを行なうてゆくこととした。

第1回目の講演会は竹内洋岳会員を講師として来る2月5日実施する。また、新名誉会員ハリッシ

**報 告**

ユ・カパディア氏が来日されたおり、東京、名古屋、関西地区でのインド・ヒマラヤ関連の講演を計画することとした。

**2 団体会員の登録名変更について**

会員番号482「京都一中洛北高校山岳部」を「北山の会」に変更。(承認)

**3 後援願：国立民族学博物館**

3月25日、山本紀夫氏による秩父宮記念山岳賞受賞記念講演会「登山・探検・フィールドワーク―地球の高みにむけて―」の開催、主催国立民族学博物館 (承認)

**【報告事項】**

**1 平成18年度海外登山基金申請**

状況について(古野)  
去る12月末をもって申請締切。現在、5件の申請があった。来る

1月30日に、海外登山基金委員会(委員長田邊副会長)を開催し、基金助成登山隊を審査する予定。なお、審査に際しては、助成基準をある程度明確にする必要があるのではとの意見があった。

**2 山梨支部新年会について(田邊)**

1月5日、30数名の会員を得て盛大に開催された。田邊副会長が出席。

**3 東海支部・ローツェ冬期南壁登山隊について(吉永)**

12月27日、15時35分、第2次アタック隊(田辺、山口、ペンバ・ Cholte)が南壁を完登し、頂上稜線に到達。ローツェ登頂は達成し得なかったが、南壁を完登した。英国山岳会等より活動結果を称賛するメールが多数入った。なお登山隊は、1月中旬帰国の予定。

**4 「土曜懇話会」の開催日程について(田邊)**

会員集会の充実とルームの有効活用を図る観点から来る1月より次の日程で開催する。  
1月20日 我が国南極観測の50

年(平山会長)

2月3日 最後の辺境、東チベットの未踏の山と氷河(中村保会員)

**5 「山岳保険」について(賛田)**

去る10月、検討チームが設置され、検討中。現在、本会も団体傷害保険を扱っているが、日本山岳協会の山岳共済保険との比較検討を行ないつつ、より高い会員サーピスに資する制度を幅広く継続して検討を重ねることを確認した。

**6 新名誉会員ハリッシュ・カパディア氏からの返信について(吉永)**

年次晩餐会終了後、カパディア氏に名誉会員をお受けいただけさかどうかとの問い合わせをしたが、先般、同氏より喜んで受ける旨の返信があった。

**7 次号の「Japanese Alpine Journal」の内容について**

第一部：特集―気候の変化と氷河変動の影響  
第二部：2006年の価値ある記録

**8 12月度入会者 7名**

# ルーム日誌 1月

- 9日 アルパインスケッチクラブ
  - 10日 理事会 事業委員会 アルパインスキークラブ
  - 11日 図書委員会 指導委員会 山の自然学研究会
  - 12日 総務委員会
  - 15日 総務委員会 資料委員会 フォトビデオクラブ
  - 16日 百年史委員会 山研運営委員会 アルパインスケッチクラブ
  - 17日 三水会 山岳地理クラブ つくも会
  - 18日 青年部 アルパインスキークラブ
  - 19日 中央分水嶺委員会
  - 20日 土曜懇話会
  - 23日 九五会 00会
  - 24日 常務理事会 指導委員会
  - 25日 自然保護委員会 山遊会 プモリ研究会
  - 26日 広報委員会
  - 29日 財務委員会
  - 30日 会報委員会 海外登山基金委員会 ゆきわり会
- 1月来室者491名

## 会員異動(1月)

- 物故
- 三尾龍民 (4198) 06・10・21
  - 清水征四郎 (13768) 07・1・4
- 退会
- 石 弘光 (5754)
  - 中本憲一 (6099)
  - 菅原修三 (8840) 北海道
  - 吉中 登 (9256) 宮城
  - 高柳生雄 (9757)
  - 長廣史江 (10162)
  - 荻子 昌 (11369) 東海
  - 吉中 久 (11989) 宮城
  - 田村恭次 (13880)
  - 松田成二 (13942) 福岡
  - 塩屋 薫 (14081) 北九州
- 改名
- 京都一中洛北高校山岳部 (482)
- 北山の会 ←
- (洛北高校・大木高校のOB会)



日本全国 9都市 よりソウル経由でカトマンズへ  
(発着地) 札幌・函館・青森・新潟・東京・名古屋・大阪・岡山・福岡

**発表!! 大韓航空カトマンズ線就航記念**

**春のネパール・ヒマラヤ・トレッキング10日間**

出発日: 2007年 3/18、3/25、4/8

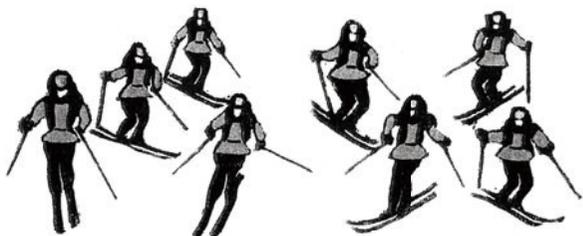
- アンナプルナ・ダウラギリ・パノラマ・トレッキング
- エベレスト展望トレッキングとシェルパの里
- ランタン・ヘリ・トレッキング
- マカルー・カンチェンジュンガ展望トレッキング

◎詳細パンフレットを  
ご請求下さい。

国土交通大臣登録旅行業第490号/社日本旅行業協会正会員 © トレッド保証会員

**ALPINE ツアーズ サービス 株式会社**

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911  
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557  
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com



雪原に舞う

奥野溪石



◆中央分水嶺踏査報告書の販売について

中央分水嶺踏査委員会

創立100周年記念事業の一つである中央分水嶺踏査は、2月17日に最終報告書を発刊するとともに、記念フォーラムを開催いたしました。この報告書を会員の皆様には1部1200円(予定)、送料別実費負担で販売いたします。購入希望の方は、FAXまたはハガキで本部事務局まで申し込んでください。なお、非会員の方にも、1部2000円、送料別実費負担で販売いたします。報告書の目次は、JACのホームページ上で見ることが出来ます。

◆土曜懇話会のお知らせ

すでに『会報』12月(739)

号で、土曜懇話会については詳細をお知らせしました。会員集会の充実とルームの有効利用を図る観点から企画、実施しています。会

インフォメーション

の長い歴史や、最近の山登りの実態などを知る良いチャンスです。ふるってご参加ください。

どちらも、104号室にて開催予定です。

●第3回土曜懇話会

日時 4月7日(土)14時

テーマ「エヴェレスト登山とヒマラヤ鉄の時代」

話し手 平林克敏副会長

●第4回土曜懇話会

日時 6月16日(土)14時

テーマ「2006年冬のローツェ

南壁の初完登について」

話し手 田辺治(冬期ローツェ南

壁登山隊長)

問合せ&申込 事務局まで

◆第35回山岳史懇談会

図書委員会

『日高山脈の登山史』

昭和初期のパイオニアワークから戦後までを、数々のエピソードを交えながら、高澤光雄氏(北海

道支部)に語っていただきます。  
\*図書交換会(12時から)と同日開催いたします。

日時 3月3日(土)16時より

場所 山岳会104号室

問合せ 松沢節夫

TEL 042-6233-5666

(E-mail) adh08760@syd.odn.ne.jp

◆「101の会」が発足

新入会員(142077143

26)有志による同期会が発足した。同会は昨年10月に開催された

新入会員オリエンテーションの参加者に呼びかけ、賛同した33人で

結成した。12月に開催した発起人会

議で名称を「101の会」に決め、諏訪吉春代表以下担当役員を選出。年会費は2000円、定例

山行100回を目標にして活動する。定例会は毎月第1水曜日午後

6時から日本山岳会会議室で開催する。(広報担当 別所宗郎)

◆千葉県立中央博物館企画展示

「山の科学画」のお知らせ

氷河地形研究者であり山岳鳥瞰

図作家として知られる五百沢智也

氏の、日本アルプスやヒマラヤを

中心とした鳥瞰図を、地形の解説なども加えて系統的かつダイナミ

ックに展示します。

会場 3月3日(土)5月27日(日)  
関連イベント(いずれも事前申し込みは不要)  
■講演 3月18日(日)13時30分~15時  
五百沢智也「山の科学画―山を調べ・山を描く」  
■シンポジウム 4月21日(土)・22日(日)  
寒冷地形談話会「日本・ヒマラヤの氷河地形に関するシンポジウム」  
問合せ 八木まで  
TEL 043-265-3879  
詳細はHPを参照ください。  
http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/

◆大町山岳博物館、1~3月の展示と催しのお知らせ

■企画展「北アルプス、山人たち(やまんど)の系譜」―嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景―  
山人としての上條嘉門次、遠山品右衛門、小林喜作の実像に迫り、その時代の背景や山案内人たちの系譜をたどります。

会期 1月27日(土)~3月25日(日)

(9時~17時)

入場料 大人400円、高校生3

00円、小中学生200円

■講演会(参加費無料、申込不要)

演題 「嘉門次、品右衛門、喜作

登場の背景」

### 山本紀夫 秩父宮記念山岳賞受賞記念公開シンポジウム

主催：国立民族学博物館  
後援：日本山岳会、京都大学学士山岳会、  
西堀榮三郎記念「探検の殿堂」

かつて日本のフィールドワーカーの大半は、山歩きや山登りを通して自然に接し、そこから野外科学の道に進んだ人たちでした。とくに、大学の山岳部や探検部は優秀なフィールドワーカーを多数育成する場所にもなっていました。ところが、近年、若者たちの山離れや自然離れは激しく、山岳部や探検部のほとんどは部員の減少に苦しんでいます。そのせいで若手の野外科学研究者が育ってこないという嘆きがあちこちで聞かれるようになっていきます。一方で、山岳地帯などを舞台にした野外科学の分野では、依然として若者だからこそ可能になる研究が少なくありません。

そこで、本シンポジウムでは、アンデスやヒマラヤなどの山岳地域における長年の研究調査により2006年度の秩父宮記念山岳賞を受賞した山本紀夫氏を中心として、大学時代に山岳部や探検部に所属し、その後フィールドワーカーの道に進んだ方々の参加をおおいで、映画と講演によるシンポジウムを行ないます。

日時 3月25日(日) 13時～17時  
場所 国立民族学博物館(大阪府吹田市千里万博公園10-1)  
講演者 斎藤惇生、斎藤清明、松林公藏、鹿野勝彦、  
石毛直道、山本紀夫  
問合せ 国立民族学博物館 関研究室 (TEL06-6878-8252)  
E-mail: sekiken@idc.minpaku.ac.jp

講師 菊地俊朗氏(山岳ジャーナリスト)  
日時 3月11日(日)10時～11時30分  
問合 庶務の平林まで TEL026-1-22-0211  
E-mail: sampaku@city.omachi.nagano.jp  
http://www.city.omachi.nagano.jp/sampaku/  
詳細、その他の催しはHPを参照ください。

◆今号は一般の方にもご購読いただけます。

#### 『季刊民族学』119号刊行 特集「河口慧海の道」

04年に発見された「河口慧海日記」を第一線の研究者が克明に読み解きます。06年の現地調査を写真や日記原文などの資料とともに紹介、謎につつまれていた慧海の足跡の全貌を他紙に先駆けて明らかに

かなものとしています。

「申し込み方法」 1冊2100円  
十送料290円 計2390円  
郵便局備え付けの用紙に「季刊民族学」119号希望と明記のうえ、左記口座までお振り込みください。  
00940091240686  
財団法人千里文化財団  
入金が確認でき次第、送付させていただきます。

TEL 06-6877-8893  
FAX 06-6878-3716  
E-mail: minpakutomo@senri-for.jp

#### ■訂正

1月(740)号、17頁2段4行から10行を以下のように訂正してください。

#### 8 大台ヶ原・西大台地区の「利用調整地区指定」について

西大台地区「利用調整地区」指定については、本会も構成員の一員である西大台地区利用適正化計画検討協議会において検討されてきたが、中央環境審議会自然環境部会(2006年12月1日)において、吉野熊野国立公園区域及び公園計画に関する諮問(この中に本件も含まれる)が、原案通り答申がされた。

順調に進めば、本年4月から入山規制が実施されることになる。

#### ◆編集後記◆

●冬のローツェ南壁完登は、久しぶりに明るいニュースとなりました。たとえ頂上まで到達できなくても、充分に意義のある登攀だったと思います。1月末に開かれた広報委員会では、帰国早々の田辺隊長を招いて、山岳担当記者の為に話をしてもらいました。今月号にその抜粋を掲載してあります。

●ほんとうに久しぶりに冬の北八ヶ岳を歩いてきました。暖冬の影響で山麓は雪が少なかつたのですが、稜線は例年並みで、雪山登山を楽しみました。比較的若い人も目立ち、雪山に少し登山者が増えてきたように感じられ、すごくうれしくなりました。(神長幹雄)

#### 日本山岳会報 山 741号

2007年(平成19年)2月20日発行  
発行所 社団法人日本山岳会  
〒102-0081  
東京都千代田区四番町5-4  
サンビュウハイツ四番町  
TEL 東京(03)3261-4433  
FAX 東京(03)3261-4441  
発行者 日本山岳会会長 平山善吉  
編集人 神長幹雄  
E-mail: jac-kaiho@jac.or.jp  
印刷 株式会社 双陽社